

## 菅笠日記と波多横山

和泉書院 三嶋健男・宮村千素著「現代語訳 菅笠日記」から大仰に係る所を拾い出してみよう。

さて、三渡りから二里という所に、八太という宿場がある。

八太川、ここも板橋である。

雨はなお止まずに降っている。

このようでは吉野の花はどうであろうか、と歩きながら友達どうしお互いに話を交わして、

春雨にほさぬ袖よりこのたびはしをれむ花の色をこそ思へ  
田尻村という所からしだいに山路にかかって、谷戸、大仰などという里を通り過ぎてゆく。

ここまでの道の途中、所々桜の花盛りである。

立ち止まっては見ながら行く。

しばしとてたちとまりてもとまりにし友こひしのぶ花のこの本

大のき川は大きな川である。

雲出川の川上という。

この川の向こうの方もやはり同じ里で、多くの家々が立ち並んでいる。

さて、川辺を上って行く辺りの景色は、大変すばらしい。

巨岩が、山にも道の辺りにも川の中にも非常に多くて、所々に岩淵などがあるのを見下すと、大変恐ろしい。

あの吹黄の刀白が詠んだ、波多の横山の巖をとというのはこの辺りであろう、と  
県居（あがたい）の大人（うし）が言われたのは、なるほどその通りである。

鈴鹿にもその跡と言ってあるのは、もともと偽りであった。

ここを通り行く頃は、雨も止んだ。

小倭の二本木という宿で、物など食べしばらく休憩する。

八太からここまで二里半であるという。

そこを過ぎて垣内という宿へ一里半。

その垣内を離れて、阿保の山路にかかる時分、また雨が降り出して本当に辛い。

ちょうど折から鶯の鳴く声を聞いて

旅衣たもととほりてうくひすとわれこそなかめ春雨のそら  
どんどん行くと、峠に至る。ここ迄は一志郡。

# 1、距離感覚について

「菅笠日記」では、①三渡りから二里という所に、八太という宿場、②八太からここまで二里半、③垣内という宿へ一里半というように距離が書かれている。この距離感を一度検証してみる。



三渡橋から八太宿まで約8.2Km



八太宿から二本木宿まで9.2Km



二本木宿から垣内宿まで約5.9Km

現代の地図から初瀬街道をトレースしてみると、菅笠日記に書かれた距離とほぼ一致することが分かります。

道標のようなものが整備されていたので、往時の人々の距離感は現代から見ても正確なものがあったことが伺えます。

## 2、県居の大人

菅笠日記に書かれている「県居の大人が言われた」ことが気になります。県居大人とは、江戸中期の国学者で、本居宣長の師に当たる賀茂真淵のことである。

国学者賀茂真淵は「万葉考」の中で次のように述べている。

・こは伊勢の松阪の里より初瀬越して大和への行道の、伊勢のうちに今も八太の里あり、その一里ばかり彼方に垣内という村に横山あり、そこに大きな巖ども川辺に多し是ならんとおぼゆ

賀茂真淵は、八太の里から一里彼方に横山があると述べているのである。



八太の里から一里彼方の地といえ、それは大仰の里である。(\*^\*)v

「垣内という村」とあるが、もともと垣内（かいと）とは九世紀初めの荘園開発をとおして、平民百姓が家宅周辺に菜園などを造成し、荘園領主から収奪されない土地を持つようになり個人所有が確立されてくる。

そして、九世紀以降には自己所有の土地であることを強く主張する必要に迫られ、必要な境界には他の土地と異なることを明確にするため、垣をめぐるせたのが垣内である。

これが初期中世村落といわれるものである。

小字地名図を見れば、大仰においても垣内地名がある。

大仰向川原の上垣内、大仰村出の堂垣内・田垣内・久保垣内がそれである。

なぜ賀茂真淵は、わざわざ「垣内という村」と記述したのか定かではないが具

体的な大仰という村名を知らなかったため、汎用的に「垣内の村」を使ったと推測するものであります。(^^)



### 3、大仰の景観

昭和の時代になってあちらこちらが横山の候補にあがってきているが、飛鳥の世にさらに近づく江戸期の著名人が絶賛する景観が、大仰の里にあったのである。

悲劇の十市皇女の心を癒す景観が、大仰の里にあったのである。

菅笠日記に書かれている「川辺を上って行く辺りの景色は、大変すばらしい。

巨岩が、山にも道の辺りにも川の中にも非常に多くて、所々に岩淵などがあるのを見下すと、大変恐ろしい。」

というように、今でもその面影は残っている。

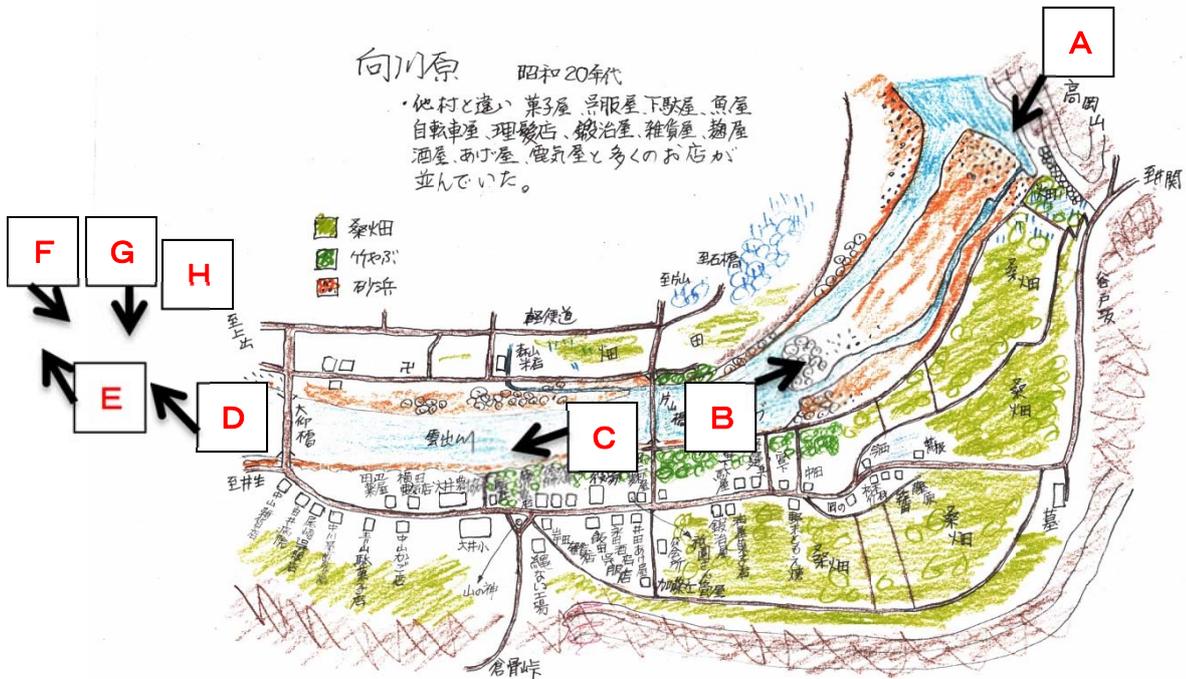
今でこそ樹木で覆いかぶさってしまっているが、堰守神社跡がある高岡山や井生崖、笠着き付近など岩肌が見える山だった。

川床がすべて岩肌である雲出川。

権現淵の大岩にしろ、大井小学校前の岩や大仰橋の上の大岩、笠着きの大岩など子供の頃（昭和30年）の夏の遊び場で、その深さも尋常ではなかった。

コンクリートの堰ができ、採石で綺麗な瀬もなくなり頑丈な堤防もでき、大き

なる川も様変わりしてきてはいるが景観はそれほど変わっていない。  
 今は樹木に覆われ見通しが悪くなっているが、高岡山から見るふる里大仰の景色は、子供心ながら和むものがありました。  
 その頃は全く十市皇女のごことは知りませんでした。



□今の景色を眺めてみる

A：高岡山から



B：片山橋から高岡山を見る



C：片山橋から大仰橋方向を見る



D：大仰橋から井生崖を見る



E：井生崖より笠着き方向を見る



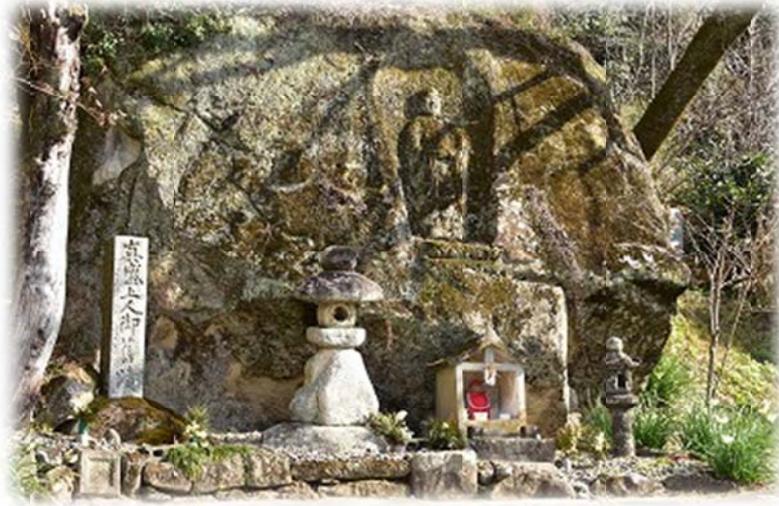
F：赤岩橋から笠着き方向を見る



G：笠着きから井生崖方向を見る



H：笠着き地藏さん



国学者賀茂真淵が何の根拠をもって「八太の里から一里ほど先に横山あり」といったのかは定かでないが、他の地域と比べた場合そのスケールからして的確を得た景観がふる里大仰にあったと想像できる。



これは、雲出川の上流にある家城ラインの写真である。  
雲出皮の中流大仰の付近も、飛鳥時代はこのような景観であったと想像できます。

ふる里の景色を改めて眺めながら、もう一度万葉集を開いてみよう。

十市皇女参赴於伊勢神宮時、見波多横山巖、吹茨刀自作歌

河上乃 湯都盤村二 草武左受 常丹毛冀名 常処女煮手

吹茨刀自未詳也。但、紀曰、天皇四年乙亥春二月乙亥朔丁亥、十市皇女阿閉皇女参赴於伊勢神宮。

吹茨刀自のことについては不詳とされている。

伊勢神宮へお供として参り吹茨刀自が作った歌と思うが、補足説明のような前後にある文言は、大伴家持など万葉集を編纂した方々が記載したものでないのだろうか。

「波多横山」を絶対的な地名・住所と理解しているが、吹茨刀自が選者からどんな所で詠んだのですかと問われたとき、「こんな風景の場所で、こんな気持ちを詠んだのです」と答え、それを元に選者が表題のように書き加えたのではないのだろうか。

吹茨刀自の「はい、波が多く立ってるようなギザギザした低い山並みのある景色の中に、岩肌が見える心癒される場所でした」との話から、ああ～それならば、「波多横山の岩を見て」がいいと判断したのだろう。

波多横山は地名ではなく、ギザギザした低い山が横に連なる「山並みの形容」でありそのような場所で詠ったということではないのだろうか。

ふる里の山並みを改めて眺め、ふと私は納得していました。

そして、その場所とは我がふる里「大仰の里」である思いが強まりました。

#### 4、十市皇女は何処を通ったか

初瀬街道は室町時代に開けていたとされるが、飛鳥の時代は定かでない。徒歩より移動する往時の人々にとっては、現代の自分が困難だろうと思うような難所でもそんなに苦にならないことだと想像はできる。

文献では大和から伊勢に入る道には加太山を越えて鈴鹿の関に至る道と、名張から青山峠を越えて垣内に至る道があり、垣内からは二本木に行かず川口から波瀬に至る道が定説になっているようである。

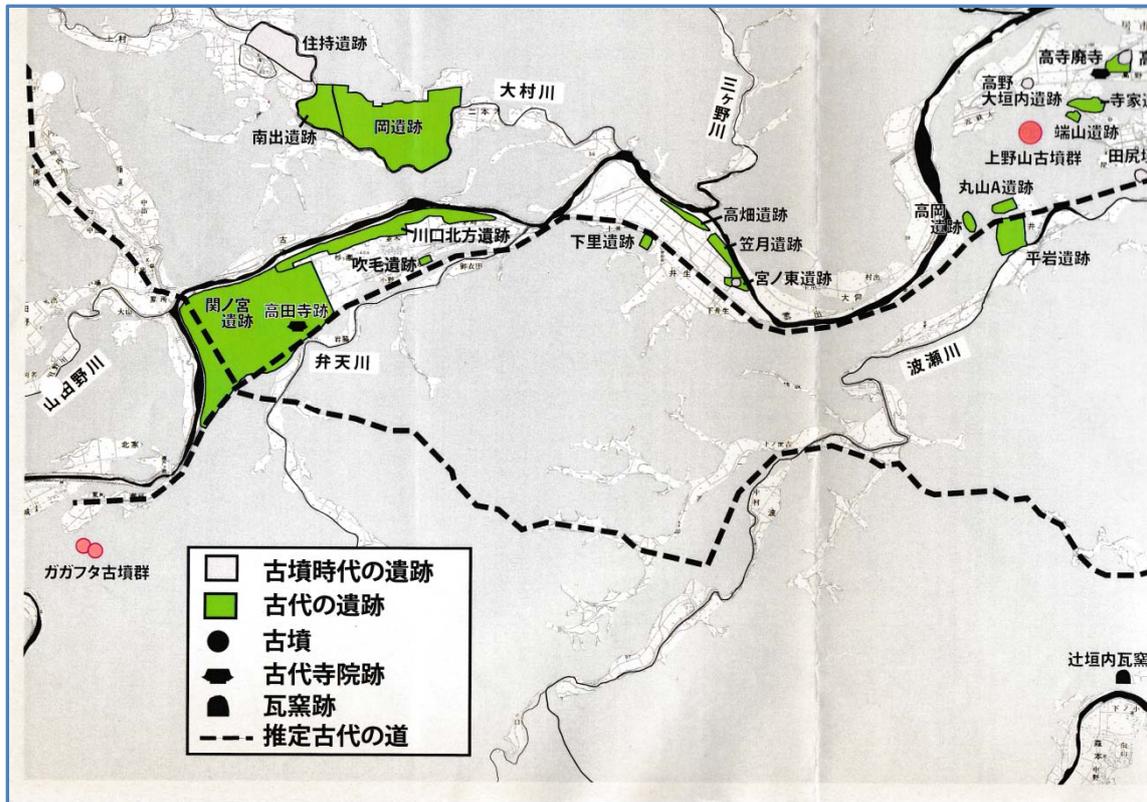
高見峠などからの道もあったようであるが、十市皇女の亡き夫（弘文天皇）の子供である壹志姫王が豪族波多氏に預けられていたこともあり、再会のためにも八太の里に来ていることは想像できることから、青山峠越えて伊勢に来たとすることは妥当であると思われます。

さて、大仰を通っているだろうか？

676年の2月13日に阿閉皇女と出立し、2月15日には八太の里に着いているようであり途中寄り道をしている余裕はないだろうと思われる。

しかし、大仰を通ったと思いたい、願望である。

ここに平成25年9月12日「栲幡皇女と十市皇女・二人の女性と一志の道」の演題で山中由紀子氏の講演を聞いた時頂いた資料がある。



山中氏の話によると、考古学的にも推定古代の道として、現在の県道15号線（久居美杉線）をトレースする道がありました。

人が集まるところに遺跡が残り、当然人の動きがある。

遺跡周辺は生活の場であり、遺跡間を往来する人物があるわけでそこに自然と道ができる。

私はそう思う。

人通りのない山道を時間をかけて波瀬へ抜けるよりは、集落が見える景観の良い大仰方面への道を選ぶのは、これ自然である。

そうなんです、十市皇女一行は関ノ宮に寄り南に下がらず、大仰をめざし井生崖を通り谷戸を通り八太へ向かったのです。

その途中、井生崖から高岡山を望み大きな川の巖を眺めふと浮かんだのが

河上乃 湯都盤村二 草武左受 常丹毛冀名 常処女煮手

である。(\*^\*)v

5、まとめ

万葉集を初めてひも解き、しっかりと「見波多横山巖」を見たとき「何でい

ろいろな説が出てくるの？」と逆に悩んだが、「菅笠日記」を読みあらためて故郷を眺めたとき、飛鳥人の心を癒す「波多横山」その場所は大仰だという思いが深まった。

- ①現在にも残る大きな川の景観
- ②江戸期の著名人が、その目で風景を眺め記した文書
- ③それらが言う距離感の妥当性
- ④推定する古代のルート

今は、賀茂真淵が何の根拠により「波多横山」が「初瀬越して大和への行道の八太の里から一里ばかり彼方に横山あり」と記したか知りたい。

このミステリアスな万葉歌は松本清張の点と線だ、もうしばらく楽しもう。

つづく

---

#### 【参考資料】

- ①現代語訳 菅笠日記 三嶋健男・宮村千素著 和泉書院
- ②一志町史 上巻 一志町教育委員会
- ③みえ歴史街道ウォーキングマップ 初瀬街道 三重県環境生活部
- ④Yahoo!japan マップ
- ⑤新日本古典文学大系1 萬葉集一 岩波書店  
佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注
- ⑥「栲幡皇女と十市皇女・二人の女性と一志の道」  
平成25年9月12日 山中由紀子氏の講演資料